

千曲會記事

第四九号

一九五四年

母学の発展と千曲会の強化

千曲会顧問 蒲生 俊・興

終戦後我等の母校も流石に名実共に変貌した。単科大学運動は失敗に帰したが、いまや信州大学繊維学部として本学中最も充実した重要な存在としてその一翼を担っているのである。信州大学は全国で七二校の国立大学中所属人員数からは第十三位に当るが、如何せん広大な長野県下の四カ所に点在した六学部を擁する、所謂脚の太い大学であり、之が運営統制も却々容易ではない。それでも本学部や医学部は新設新制大学としては施設の点でも、亦教授陣営から観ても、恥かしからぬ存在であることは自他共に任ずる所である。本学部は大学昇格に伴い、教養部職員は拡充から各科の充実に向上一路を辿り、新本館や電子顕微鏡研究室等を増築すると共に、学庭内の植込みなども漸次整備されて一層学園らしい雰囲気を感じ出されて来たことは誠に嬉しいことである。

二

大学の運営は学制改革後凡て民主的な委員組織となり、教官の互選によつて選出される学部長の下に各教官は指導委員、学科主任、図書委員、予算委員などに分属し、事務長以下の各事務職員を脅かし、大抵の各事務を担っている。されど近年に於ける学部の運営は極めて窮屈となり、人件費の膨脹の割に研究費や教育費等の一般物件費が著しく削減せられていく。戦前の大学や専門学校は人件費四・五に對し物件費五・五の比率を保つていたものだが、近年は人件費八に對し物件費が二・二という惨憺たる現状にある。従つて割当てられた校費の範囲では昂騰した光熱水料等を支出すれば教養研究費の如きは教授一人に對し僅に三万円以下という哀れさである。又教育研究旅費の如きも本学部全体で僅に二・三万円であり、之を教官一人に割当てれば一カ年二千五百円宛の出張旅費という驚くべき状態である。さればこそ、小、中学校、高

校等では所謂PTAや同窓会の力をかりて辛うじてその惨状を糊塗しているわけであるが、遺憾ながら、本学部にはかかる藩屏となるものがないのである。近年新制大学の設置に伴つて、その教室が新設されていく大学は何れも私立大学のみで、国立大学には見られないという現象から推して、窮乏な国家予算の分取りよりも段々アメリカのようになり、豪華な同窓生成功者によるうわしい寄附金によつて、学園の充実を図る時代と変わったような気がする。

三

大学教授の任務は学生を教育する責務の上に科学の研究という重責が課せられているのである。教官の研究的態度は自ら教室の雰囲気醸し出し、学生に對する以心伝的な教育効果を形成することも勿論であり、かくして初めて母学に對する学生のプライドが涵養され各々安んじて修学に励むことも出来るのである。あるまいか。さればこそ、教員の研究心を満足せしめるに足る諸経費と施設の充実が大の生命であり、近時少いながらも、文部省を始め各々が夫々研究費を支給する制度をとつていく所以もここに在るのである。

である。

四

学内のことはこの位にして、話題を本学部同窓会たる千曲会に転ずることとする。専門時代では三カ年、大学課程で四カ年の卒業を終え、就職試験の懇切な努力によつて、不満足な職となつたものではなく、大正三十一回同窓生を選出したから四十余年、養蚕学科一・〇八五名、製糸学科一・〇四二名、紡織学科五・八四名、繊維化学科三七七名、養蚕別科及び教養科四四五名、合計三七八名の同窓生が夫々の分野で活躍せられていく等の同窓が一同となつて母学の為に一肌脱ぐことになつたら、素晴らしい実力を発揮するに違いないと思う。

毎年の千曲会総会に於て問題になることであるが、近年に於ける千曲会は益々貧乏状態を維持するのみで、手も足も出ない有様なのである。戦前当時の本会の会費の納入率は平均七五％位を維持していたが、近年は一五％以下に止り、集つた会費が事務員の給料に足らないという有様である。いま試みに昭和二十六年と同二十八の二回に亘つて会費納入率を調べて見ると、

学科	昭和二十六年	昭和二十八年
養蚕学科	三・八％	二・四％
製糸学科	二・九％	二・〇％
紡織学科	二・九％	二・〇％
繊維化学科	二・九％	二・〇％
養蚕別科	二・九％	二・〇％
教養科	二・九％	二・〇％
平均	二・九％	二・〇％

(備考) 各科の平均は紡織一回は九回とし繊維一回は三四回として平均した三〇回とし繊維一回は三四回として平均した

々悪化する一方であることは会務遂行の爲、誠に憂慮にたえない所である。戦前当時は収金郵便の制もあり又送金に要する費用も比較的安かつたことと云うが現在の会費は年々僅か二百円であるから、年一回の納入に事欠く会員は無からうと思われ、従つて今後その納入率を高めるには各支会の一層の御骨折を願ふ必要は勿論だが、尙各クラス毎に連絡員をおいて横の連繫を緊密にし、その費用は本会が負担することも望ましいと思われる。

兎も角原動力がなければ何も出来ない。原動力は唯会費であるのみであるから、何ともしても七、八割の納入率迄こぎつけたものである。いま昭和二十八年度の各学科各回毎に丹念に会費の納入状況を調査してみると、科別によつて多少の差異は免れないが、大体の傾向から見れば、二一・二五回あたりの会員が比較的高率の納入率を多く一〇回の古参組と三三・三八回の新進組とが比較的低いようである。

以上の結果を顧ると、昭和八、九年頃から同十三、四年頃に至る頃までの同窓で現下正に四十才前後の中堅どころの納入率が比較的高くなつてい

希望するところ

賛助会員 石倉新十郎

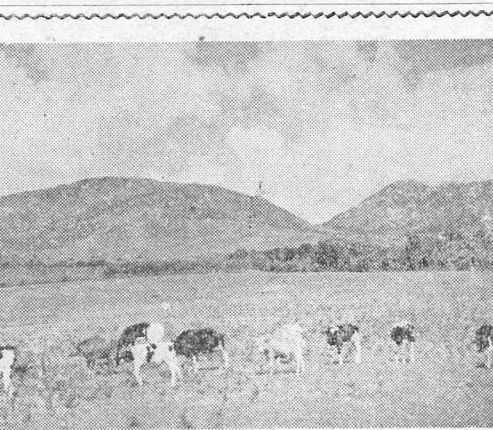
世態は動いてやまず、ことに大戦前後の変遷は甚しい。専門学校が大学になる。日本の国情も変つて、学校と社会との相互関係も全国的から地方的に移り、以前や華やかに見えた影が衰退して、将来を悲観する気分さえ出て来たようである。之を世の常として淋しく諦めるのは老人の平凡である。古きは往いて帰らず、新きは常に生きて来る。上田の天地は千古不易といえようが、其れは不変の基礎に立っているものだけである。無常の中に存在する不変のものは恰も生物体の生活体制のようである。生物体が変転し生活方式が転換すれば其れに即応して始めて永遠の発展が其の中から生れるのではないからうか。

人は同じ所に永く固着すると、世の無常を忘れ変転に即応する事をとく怠るから淋しい気分になる。即ちして日に新たな人は心の老いる事はない。若い人でも保守的気分の人は心が既に老人と同様になる。古い人は自他からのホルモン分泌を促進して若人と同じ新しい心になる事を希望いたします。

千曲会員が旧新離れがちで連結親睦を図ろうと考えるのは御尤である。大学の入学志願者が地方的に偏したのを気に病んだり、上田本位の學術

事、世の無常を忘れ変転に即応する事をとく怠るから淋しい気分になる。即ちして日に新たな人は心の老いる事はない。若い人でも保守的気分の人は心が既に老人と同様になる。古い人は自他からのホルモン分泌を促進して若人と同じ新しい心になる事を希望いたします。

千曲会員が旧新離れがちで連結親睦を図ろうと考えるのは御尤である。大学の入学志願者が地方的に偏したのを気に病んだり、上田本位の學術



夏の菅平

(撮影=柴崎高陽氏)

ます。こうした心情はきれいに洗って、旧新互に融合親和し同じ気分になる事が先決問題ではないでしょうか。其れには唯会合を重ねた所で成果は得られないと思います。旧人は先ず新しい人の心になり、老人は若返つて科学的に又社会的にも若い人と共鳴する

為して行くのではないのでしょうか。上田関係総ての方々が一途此線に向つて進まれる事ゐたす希望して止みませ

「時の人」

富岡 秀君 TH生

昭和四年製糸学科卒業以来終始一貫農林省蚕糸局系政課に在り蚕糸行政の樞機に参画して来た同君は此度紐育生糸事務所長として転出する事になった。戦前生糸事務所はRaw Silk Intelligence Bureau of Japanese Government

であつたが、此度復活は政府の出先機関でなしに日本蚕糸協会が政府からの交付金で紐育に事務所を持つ形をとららしい。Raw Silk Intelligence Bureau in New Yorkの名称が用いられるだらうか? こうした機関が復活した事、そのボスに富岡君が選ばれた事二重の慶びに堪えない私の記憶では初代所長が吉田清治氏で帰朝後蚕糸局長となり現に大日本蚕糸会々頭でもある。二代所長石黒武重氏も帰朝後蚕糸局長農林次官、農相を歴任して現に横濱生糸取

学内人事

柳沢延房先生 教授に昇任される
内田貞夫先生 助教授に昇任される
一志淑夫先生 助教授に昇任される
田玉龜太郎庶務係長 勤続三十余年の永きにわたり事務関係で尽力されて居りましたが此の度の待命にて辞められることになった。

(前頁最下段より)
産を現今の貨幣価値に換算して少くとも二千万円以上の財源を獲得しその利子を活用して母学及び会員相互の発展に資することが我々の夢である。冀わくば同門の諸士互に感奮興起して千曲会並に繊維学部発展の為に緊密に連携せられんことを!!

引所社長である。又三代植田武彦氏は日本蚕糸統制会社の常務取締役として敏腕を振られた事は承知の通りである。こうした前任者を見て富岡君の運は開けて来たように思えて喜ばしい。それもその筈元日銀理事南方開隆總裁であつた武井理三郎氏を叔父に持ち又長兄小川栄一氏は今お時めく藤田興業社長であられる所から見ても富岡君は一事務官で終る器でないのは知れた事である。そうした意味で同君の将来を楽しみに期待し見守らう。

兎もあれ紐育へ足がかりの出来たのは好い事である。私が参つた昭和十四年頃所長は植田氏その下に現紳戸生糸検査所長松本氏と現系政課長大戸氏の御二人とそれに通訳と女事務員とで生糸情報宣伝をやつておられた、私は特に御厄介になつた当時を追憶し懐しく思う。

柳沢教授工学博士号を受く



柳沢 延房氏

本学部紡織科教授柳沢延房氏は「家蚕繭の成因と営繭から見た繭糸張力に就いて」と題し学位請求論文を東大に提出中だったが今回目出度く資格を授与された。次に論文の要旨を紹介してみよう。

元来、繭からの繭糸は蚕の営繭の逆の操作であり、繭糸の収量は繭の厚み、糸の織度には繭の大小等が考えられ、繭糸張力には営繭の過程等も関連して来るので繭糸工業の基礎を明らかにする目的を以て氏は繭に関する物理量の測定という稀有の研究に着手したものである。先ず繭の形状の正確な数値的表現法を求め、結局カシニ卵形線($R + \frac{1}{2}a + \frac{1}{2}b$)とカシニ卵形線のパラメーター a 及び b の値を算出する事により、日本及支那産の繭形を表わし得る事を見出し、 $\sqrt{m^2 + a^2} / \sqrt{m^2 + b^2}$ の値により家蚕七十種は三十種の標準形に分類し得ること及びこの値を標準形番号と名づけて後の研究に便ならしめている。次に繭の体積表面積、断面積等はこの標準形番号から決定し得ることを示し

又従来の繭形表示法、即ち球形、卵円形、紡錘形、楕円形、俵形(有繭繭、無繭繭)等の多種の表現法より、パラメーター二つの本表現法の方が優れていることを明らかにしている。次に品種、雌雄別による繭形及び繭重の比較について繭の形は結局、蚕の形、営繭中の物理的諸性質によるものとみて蚕体の外形と繭形との関係を論じたもので前述のカシニ卵形のパラメーター m の二倍は生繭の身長に略等しく、 a も亦繭の身長と最大幅 b から決定され、
$$\frac{1 + \left(\frac{a}{m}\right)^2}{1 + \left(\frac{b}{m}\right)^2} = 2K \frac{b^2 - a^2}{b^2 + a^2}$$
 の関係を満たす K の値は品種に特有な常数となることを見出し蚕の形状からやがてそれが営繭繭形も推定出来ることと結論している。更に吐糸の力学の考察に就いて、従来の吐糸は繭糸を吐糸口から吐き出すものか又は張力に依つて引き出されるものであるかの点で両氏が対立していたのであるが氏は吐糸の形状は前述のカシニ卵形の二つのパラメーター a の値が等しい即ち $a = m$ の場合に示される双葉曲線であることと吐糸速度の力学の考察を映画に撮影して観察し吐糸の形状、糸の断面等の綿密な調査から結局糸は座に附着して引き出されるものと考える方が妥当であることを明らかにした。又繭、蛹の体積と繭糸量の関係を調査し三者の間には平行関係の存在することや数学的表現に立脚して繭度等の研究の基礎に利便を与えている。又簇中の繭の水平面となす傾斜角と繭形、繭形との関係を論じ氏の繭形番号、繭形番号とは傾斜角と平行関係にあること、又経済上及び煮繭上重要な繭層歩合も又この傾斜角に略平行関係を示し特に雌の場合に於いて著しい事を認めている。又蚕体の肥満弾性度(蚕体の屈曲に対する困難さ)の大きな蚕は繭形番号の大きな丸形の大きなものを営むことを確め又繭長 L は繭長 L' との間に
$$L' = L \left(1 + \left(\frac{a}{m}\right)^2 \right)$$
 なる関係が可成の精度で成立することを認めている。次に繭形及び営繭と繭糸について論じ、もと繭糸とは吐糸、営繭とは逆の相当するもので吐糸中蚕がその身体を反転させる反転回数が営繭の初期と末期とは異なること、セリシンによる膠着が不均一であること等のため繭糸中の繭形はローリング、ピッチング、ヨーイング等を複合した複雑な運動をするるが、更に外部の繭糸機の振動、繭糸速度の変化で繭糸張力はたえず変動し、糸切れの原因になり易い。今日尙座繰式繰糸法が工場、試験場等で多く使用されているが四角、六角等の多角形繭枠による繭糸速度の変化から来る張力変動は円形枠に比して明らかに不利である。この張力の変動を記録することは従来なされ

なかつたが氏はこれをスプリングの振動に変え表裏のペンを用いてドラム上に図示すること成功すると同時に従来数条の糸を抱合することと水切りを行うことの二作用のみをなすと考えられていたケネル部は営繭動作から来る突発的抵抗の緩衝作用をなすことを認めている。次に前述の張力測定の結果から見た合理的繰糸法に就いて論じている。即ち従来の繭糸、絹を除く天然繊維の紡糸法に使用されるボット法を採用することである。化繊・羊毛等に比して細い繭糸を遠心力によつて繰糸するにはボット内の空気の流れが大なる影響を有しているが氏は先ずボット内の糸形、張力等の理論的計算を行い、一方実験的に張力を測定し又瞬間撮影により実験的に得た糸形と理論によるものと比較を試み空気の抵抗を無視した理論式との一致は更に細かい糸(十四デニール以下)のボット法による繰糸法の可能性に就いて示唆を与えている。又従来の繰糸機による繭糸張力は繭の膠着抵抗、節こき部抵抗、ケネル部抵抗、フック鼓車、糸の通路の方向変化による抵抗等が累加されて最大の繭糸張力の所で枠に巻き取られるのに対しボット法では送出ローラーから導糸管を経て廻転ボット内に至り中心から周縁に巻き取られる迄の推移は張力が累減して最小張力力で巻き取られるので遙かに合理的であると述べている。之を要するに氏は従来比較的研究の乏しかつた繭の物理

的測定に立脚し製糸工業の分野に極めて忍耐強く且つ深く研究の歩を進め未開の分野を開拓し少なからざる知見と示

信大 学長選挙行わる

信州大学々長高橋純一博士は、この六月で四年満期になつたので、信大初の学長公選が行われることになった。公選規則についても種々意見があり、かなりの日数を要したが、結局投票有資格者は学長及び各学部の専任教授・助教・講師であり、学長候補者は各学部教授会から二名以内を推薦し、これに現学長を加えたものとした。

実際に学長候補者としてあげられたものは、顔触は、学外者としては務台理作(前東京教育大学学長)、金井章次(元蒙古聯合自治政府最高顧問、関口泰(前横浜国立大学学長)、田宮猛(元日本医師会会長)及び那須皓(東大名誉教授)の諸氏であり、学内者では高橋純一(信大元学長)、伊藤武男(繊維学部学長)、佐藤武雄(医学部学長)、結城朝恭(工学部学長)、太田勇治郎(農学部学長)の諸氏であつた。

この学部から誰が推薦されたかについては秘密とされているが、わが繊維学部からは金井章次氏が強力に推薦された。金井章次氏が推薦された理由や氏の経歴については後項を参照されたい。

第一次選挙は七月八日に行われたが、三名連記で投票の結果、務台理作、田宮猛、

咬とを与え製糸工業の基礎に貢献する所は極めて多いと学位審査会は結んでいる。(筆責 田中)

金井章次氏略歴
明治十九年に生れ、上田中学二高を経て東大医科大学医学科卒(大正二年)

大正二年、内務省伝染病研究所(北里伝染病研究所の前身)に入所

大正九年、欧州留学、英国病理学会々員に推薦される

大正十一年、国際聯盟事務局
保健部員(在シニエ)
大正十二年、堀明、慶応大学
医学部教授
大正十三年、満鉄衛生課長並
に満鉄衛生研究所長
昭和六年、満鉄退社
昭和十二年、蒙古聯合自治政
府最高顧問
昭和十七年、同顧問を辭し歸
朝
現在、上田市馬場町在住、上
田協同組合理事長
主なる著書 満蒙行政論、
社会不安の考察、平和と思
想

金井氏が信大長候補者

として推薦された理由

(一部の有権者に配布されたもの)

金井章次氏が満蒙経営の事
に参画したのは周知の事実で
ある。
かゝる経歴上のハンディキヤ
ップがあるに拘らず学長候補
の一人に選ばれたのは主とし
て次の理由による。
その一つは高潔な人格であ
る。同氏の人となりについて
は種々の逸話があるが次の例
によつてその片鱗を窺うこと
が出来よう。終戦後甚しい窮乏
の中にあつて、生計のことに
追われつゝも土地の青年や大
学関係の生徒に一週二回自宅
に於いて人文、社会関係の学
を講じて今日に至つてゐる
が、その講義に列すること七
十年に及ぶ者も二三にとどま
らない。かように多年に亘つ
て青年・生徒を惹きつけてゐ
るのはその学殖の深さ、広さ
以外に、その恬淡にして寛闊
な人間的魅力によるものと思
われる。
第二に自然、人文の両面に
亘る豊かな学識である。自然
科学の方面に就いては説明を省
略する。人文科学関係につい

学長候補に推す如きは常軌の
外と言わざるを得ないであら
う。同氏の言動を通じて見ら
れる思想傾向は強いて名づく
るならば、リベラリズムと言
うべきであらう。然もそれは
戦後節を愛した所謂転向者の
輩と同日に論ずることは出来
ないものがある。
この事は何よりも戦時中に出版
された同氏の著書「満蒙行
政論」が雄弁に物語つて居
り、又更に西田幾太郎氏や田
辺寿利氏の如き当時としては
自由主義者と目されていた学
者と親交を結び、その学説に
基いて経綸を施かんとした
事実、及び遂にかゝる勢力の
圧力によつて大戦勃発後いく
ばくもなく蒙疆聯合自治政府
の最高顧問の地位を辭し去つ
た事実によつても明らかであ
る。
今、我が信州大学に急速な
解決を迫られてゐる諸問題山
積してゐる時に當り尋常一様
の力量を以つてしては、この
難局を打開することは至難で
あると思はれる。
金井氏が学長候補に選ばれ
た所以は、かゝる難局に堪え
うる高邁な識見・人格と旺盛
な実行力に期待がかけられる
からに外ならない。

支部便り

山形支会近況報告

小野 昭夫 登(三)

千曲会山形支部も今年早々久
しぶりに山形市に於て、先輩

諸兄の多数の参列を得、盛
大裡に総会を開催致しまし
た。現在山形県下に在住され
る各位は二十四名にも及び、
総会出席者は十二名でした。
総会は母校の状況報告並に支
会々員の動静報告其の他会務
報告、議事進行にて母校の発
展を期すべく協力方を誓つて
宴會に移つた。此の席上役員
の改選を行い、支会長には栗
原章氏、副会長に長谷川弘平
氏がそれぞれ選出され、支会
員諸氏も今後は大いに山形支
会を通じて、先輩諸兄の連絡の
緊密化を満場一致で賛成され
た。又先輩各位には支会発展
の爲、多大の寄附金を送られ
て陰に陽に会盛隆の爲御協力
戴いて居る事は誠に厚賀の至
りに存じています。
尚、四月には片倉山形登壇に
は新所長に有賀彰夫氏を迎え
我々会員としても一層意を強
めよう、今後の発展は期して
待つべきものと期して信じてま
す。最後に全国会員の皆々様
にも是非来形の折は当支会に
御寄り下され、今後の御教導
を賜われれば幸甚此の上なしと
思います。

山形支部役員

支部長 栗原 章
副支部長 長谷川弘平
幹 事 井上兵一郎
佐藤 克治
小野 昭夫

徳島支部便り

宇根山哲夫 (糸三)

徳島支部は十七人ばかりの小
世帯ながら折に於ては電話
一本で会合し友情を温めてい

る。
前支部長の遠藤文平氏(糸一)
は徳島デューンズストアの支
配人としてノビリしたいか
らと無理からにバトンを生小
に渡されたが、後輩の面倒は
よくみてくれるので慈父とし
て慕われてゐる。
会員はそれ／＼専門の分野で
活躍しているが、異色の人々
としては、天野武良氏(登七)
は登七試験場退職後、悠々自
適の生活を送つており、華岡
弥治郎氏(糸三)は呉服問屋
の旦那さんとして登七とは縁
をきつて久しい。四宮太郎君
(紡九)は鳴門市で貝ボタン
の製造をしておりデフレ何処
吹く風といった経営振りを続
けている。稲富信一君(紡専)
は劇場主として、黒字経営で
懐具合は温かそうだといつ
たところ。
官庁方面では、農林省統計調
査事務所(糸三)がいて、経済調査
課長として手腕を遺憾なく発
揮している。県庁には、支部
長を仰せつかつてゐる小生宇
根山哲夫(糸一)は在任唯月
日を送つてゐるが同課には、
織維保主任として敏腕家、林
邦治君(登三)と新制大学出
として将来を期待されてゐる
矢島卓也君(新制大糸一)が
いる。川人良次君(紡三)は
美馬地方事務所民生課主任と
して門外漢ながら仕事熱心な
かわれてゐる。工場方面では
東邦レーヨン徳島工場に学究
肌の村田一由君(登二)が試
験部に於て業績をあげてゐ
る。依田達郎君(化七)萩原
孝夫君(化九)がいて、とも

に上田同窓の優秀性をみとめ
られてゐることは喜ばしいか
ぎり。石立輝久君(紡二)は
長尾産業K、Kの工務課長と
して重きをなし、徳島綿業K
K、には米内繁一君(紡三)
がいて、工場で重宝がられて
いる。筒井製糸K、Kには原
料課主任、仁尾幾朗君(登三)
が温厚篤実な人柄と実直な仕
事振りで会社では、なくては
ならぬ人となつてゐる。芦谷
哲郎君(登三)が郡是川田乾
満場にいる。若い次長のよ
うな仕事をしており、毎日忙
しくスクーターで飛び廻つて
いる。以上のメンバーが徳島
で上田の名譽を担つてゐる面
々である。
原稿の送附
本会報は年四回の発行予定
で進捗しておりますからどし
／＼御意見なり御消息なり本
会宛お寄せ下さい。申すまで
もなく全国の全卒業生三千余
名に漏れなく毎回送送してお
る会員の爲の会報であり、各
各クラスの連絡などに御遠慮
なく御利用下さつて結構です
尚若年層の進出をより期待し
て止みません。
又クラス雑誌を編集なされ
た際には一部を本会宛に御寄
贈下さるようお願い致します
最近会費の納入状況も逐次
高まり悲願的であつた本会の
運営も曙光のきざしが見えて
参りました。一層相互の力を
結集して母校の発展と本会の
偉大なる理想を計画しようで
まかりませう。

隨想

信濃路四日の旅

静岡県 戸倉 八峰

「富士と浅間」——殊更に富士山を持つて行つて浅間山と競争する積りではないが、富士山のある静岡県住人の私が約二十年振りに信州入をして第一に接したのが懐かしい曾遊の山、浅間の煙であつてみればこの二つを小「トビツタ」に並べた迄だ。

五月十七日、青葉の伊香保温泉の会合をよい機会に、一足伸ばして信濃入を思ひつた十八日、榛名湖畔に立つて榛名富士を一目眺めて、高崎から一路「白樺号」で軽井沢へ着いた。その時車窓北の方

浅間の黒煙が目に入つて、昔も今も不変な素晴らしい浅間の山。本物の富士も榛名富士も到底叶わぬ活火山の浅間の雄姿、馬子の歌つた追分節、そのまゝの豪壮なる自然美、信濃人の尤も誇として今少し浅間山宣伝の力コブを入れて觀光価値を高めてはどうだろうか。

「静岡支部のニュース」戦争で静岡の系系は八割減迄転落した。一事が万事で、凡て後退するもので同窓生もマバラ、系系課は格下げされて特准課の内一係部となつて活動力極めて乏しき現状であつて、仮支部長も肩身広く母校へ報告する資料なきは汗顔の至り也。

「熱海と別所」——約東通り倉沢大入と落合つて、上田から別所の倉沢地帯で靴を脱ぐ。曾て橋本武光君が襲撃した女アコヤ倉沢令夫人を交えて五月マコヤを聞て四方山話、今昔物語に花が咲く。小生の同行者(〇兄)J氏は未知の落葉松、林檎の花、白樺の老樹等の説明を聴いて感心したのも暖国からの客人だと笑われる熱海は東京の奥座敷なら別所はその離れ屋敷い茶室の四畳半と云えよう。

俗人共押し掛ける鹿の温泉熱海よりも静岡、清津の山間湧湯別所は格別の良がある。「針塚初校校長の在りぬ系系」——翌十九日、三人で学校を訪れた。賑やか変化し完備した学園の景観ニツタリとしたローカル色の濃い山岳国に静かに建ち並ぶこの学校はこまに特色何一つなき一織維校としてだけの存在では勿体ない。学究に専心する偉大な研究家が輩出して後世一人でも二人でも不朽の名を残す偉才自然科学者の現わることが望ましい。単に平々凡々の存在では開校の初め意気込み高く歌われた「千曲の流れ」の校歌が泣くであらうとしみじみ感じた。

蒲生博士林教授の先輩、若い教授助教の各位にも会つた校長室で現学長と初対面、温厚な紳士、切に御自愛を祈るそこで旧式な思出ではあらうが、校長室には四十年一日の如く校務棟、御場が精子に腰掛けて居るゝとのみ思ふ習慣が今もつて先入観的にあるの、一寸バツが外れた感じであつた。

「八才の小娘は四十八婆となつて再会」——学校当時世話厄介になつて過ぎたH家の母人、R末亡人へ途中から往訪のハガキを出して訪ねたら既に昨春他界されたとの事、ハガキもあの世迄は届き兼ねた訳で、一年の遅いで袖振り合ひし今生の縁の御人との対面は出来ずその息女M女を五里離れた塩川村に訪ねた。旅の道草もこうなると一種の酔興と云うべきか。お年を取られ

たネと云えばそちらさんもと云ひ返される。算ればこちらには六〇才をこへは四十八才半の年と謂う、成る程馬鹿を重ねる事丈は同率で公平であつた。

余談散刻して川中島古戦場を突走つてバスで長野の善光寺参詣、一年も永生きをオラガ仏様に依頼した。一巡して建築の偉大さに再驚した。案内の岸雅兄の説明によると本堂の主柱の一本が少々斜かつてゐるのは二百余年の往年の大地震の際、この一本が被害があつて他には更に故障なかつた事を初めて承つて昔の大工の技術の精微に感服する次第であつた。矢張り善光寺は日本的の奥在、浅間山と共に信州人の誇る伝説である。

「栗林ハッピーの偉業」——廿日の午後倉沢沢の勤め、坂城駅の南条村栗林悦見兄を訪れHSD製作所を参観して事業の健全な発展に驚く、七

八才の小娘は四十八婆となつて再会——学校当時世話厄介になつて過ぎたH家の母人、R末亡人へ途中から往訪のハガキを出して訪ねたら既に昨春他界されたとの事、ハガキもあの世迄は届き兼ねた訳で、一年の遅いで袖振り合ひし今生の縁の御人との対面は出来ずその息女M女を五里離れた塩川村に訪ねた。旅の道草もこうなると一種の酔興と云うべきか。お年を取られたネと云えばそちらさんもと云ひ返される。算ればこちらには六〇才をこへは四十八才半の年と謂う、成る程馬鹿を重ねる事丈は同率で公平であつた。

余談散刻して川中島古戦場を突走つてバスで長野の善光寺参詣、一年も永生きをオラガ仏様に依頼した。一巡して建築の偉大さに再驚した。案内の岸雅兄の説明によると本堂の主柱の一本が少々斜かつてゐるのは二百余年の往年の大地震の際、この一本が被害があつて他には更に故障なかつた事を初めて承つて昔の大工の技術の精微に感服する次第であつた。矢張り善光寺は日本的の奥在、浅間山と共に信州人の誇る伝説である。

「栗林ハッピーの偉業」——廿日の午後倉沢沢の勤め、坂城駅の南条村栗林悦見兄を訪れHSD製作所を参観して事業の健全な発展に驚く、七

甲府を過ぎて目下部駅(加納

突然千曲会報の御恵送を頂き懐旧の念禁じ難く、再三繰返し拝読いたしました。私は大正十五年二十五才で母と共に赴任し足掛七年官舎に御厄介になりました。

上田で結婚し長男二女をもうけ、青春の時期を愉快に過ぎせてもつた上田は私にとり第二の故郷であります。四国の工藤兄吉兄の御尽力で発行される「一七会誌」を通し上田系系卒業生の一部動静は承つておりますが此の度は全貌を窺ひ得て欣喜極く能わず一筆啓上致します。

温容慈父の如き針塚先生、井上先生の登山姿、阿形先生の特徴ある歩き振り、六ヶし顔をした大瀧先生、会津魂を説く和田剣道部長先生、テニス運動会に活躍される佐藤利博士、黙々として研究に余念なき佐藤春博士、朝早く千曲川に出かける古谷先生、學術會議員として活躍される蒲生博士、ニコニコ時々大きな笑いを発する林教授、テニスの倉沢教授、團場主任岩崎七段、修已寮の小林老書記東寮の老夫婦等々走馬燈の様に思い出される、何しろ十銭持つて要と共に馬場町の夜店に行

不ニシルク製糸K・K・勤務の栗原義藏氏の案内で老夫婦の寓居に厄介になる。地下水の豊富な事白桃の甘味い話を承つて、涎を垂らす程ケナル

「甲州路の一夜」——小淵沢に出て甲斐の國の風が肌に爽やかに當る、南に裏富士が高く聳えて目に入つたが矢つ張り富士は我々不二、田子の浦にうち出で見る富士が本物の富士(不戻)と柿木人磨が言つた通りだ。

甲府を過ぎて目下部駅(加納

突然千曲会報の御恵送を頂き懐旧の念禁じ難く、再三繰返し拝読いたしました。私は大正十五年二十五才で母と共に赴任し足掛七年官舎に御厄介になりました。

上田で結婚し長男二女をもうけ、青春の時期を愉快に過ぎせてもつた上田は私にとり第二の故郷であります。四国の工藤兄吉兄の御尽力で発行される「一七会誌」を通し上田系系卒業生の一部動静は承つておりますが此の度は全貌を窺ひ得て欣喜極く能わず一筆啓上致します。

温容慈父の如き針塚先生、井上先生の登山姿、阿形先生の特徴ある歩き振り、六ヶし顔をした大瀧先生、会津魂を説く和田剣道部長先生、テニス運動会に活躍される佐藤利博士、黙々として研究に余念なき佐藤春博士、朝早く千曲川に出かける古谷先生、學術會議員として活躍される蒲生博士、ニコニコ時々大きな笑いを発する林教授、テニスの倉沢教授、團場主任岩崎七段、修已寮の小林老書記東寮の老夫婦等々走馬燈の様に思い出される、何しろ十銭持つて要と共に馬場町の夜店に行

不ニシルク製糸K・K・勤務の栗原義藏氏の案内で老夫婦の寓居に厄介になる。地下水の豊富な事白桃の甘味い話を承つて、涎を垂らす程ケナル

「甲州路の一夜」——小淵沢に出て甲斐の國の風が肌に爽やかに當る、南に裏富士が高く聳えて目に入つたが矢つ張り富士は我々不二、田子の浦にうち出で見る富士が本物の富士(不戻)と柿木人磨が言つた通りだ。

甲府を過ぎて目下部駅(加納

上田の思い出

旧剣道師範 小沢 丘

を終つて東京経由帰郷した。筆を擱くに際して倉沢夫妻の手厚い御接待を多謝する次第也。(静岡支会長 蚕二)

突然千曲会報の御恵送を頂き懐旧の念禁じ難く、再三繰返し拝読いたしました。私は大正十五年二十五才で母と共に赴任し足掛七年官舎に御厄介になりました。

上田で結婚し長男二女をもうけ、青春の時期を愉快に過ぎせてもつた上田は私にとり第二の故郷であります。四国の工藤兄吉兄の御尽力で発行される「一七会誌」を通し上田系系卒業生の一部動静は承つておりますが此の度は全貌を窺ひ得て欣喜極く能わず一筆啓上致します。

温容慈父の如き針塚先生、井上先生の登山姿、阿形先生の特徴ある歩き振り、六ヶし顔をした大瀧先生、会津魂を説く和田剣道部長先生、テニス運動会に活躍される佐藤利博士、黙々として研究に余念なき佐藤春博士、朝早く千曲川に出かける古谷先生、學術會議員として活躍される蒲生博士、ニコニコ時々大きな笑いを発する林教授、テニスの倉沢教授、團場主任岩崎七段、修已寮の小林老書記東寮の老夫婦等々走馬燈の様に思い出される、何しろ十銭持つて要と共に馬場町の夜店に行

不ニシルク製糸K・K・勤務の栗原義藏氏の案内で老夫婦の寓居に厄介になる。地下水の豊富な事白桃の甘味い話を承つて、涎を垂らす程ケナル

「甲州路の一夜」——小淵沢に出て甲斐の國の風が肌に爽やかに當る、南に裏富士が高く聳えて目に入つたが矢つ張り富士は我々不二、田子の浦にうち出で見る富士が本物の富士(不戻)と柿木人磨が言つた通りだ。

甲府を過ぎて目下部駅(加納

突然千曲会報の御恵送を頂き懐旧の念禁じ難く、再三繰返し拝読いたしました。私は大正十五年二十五才で母と共に赴任し足掛七年官舎に御厄介になりました。

上田で結婚し長男二女をもうけ、青春の時期を愉快に過ぎせてもつた上田は私にとり第二の故郷であります。四国の工藤兄吉兄の御尽力で発行される「一七会誌」を通し上田系系卒業生の一部動静は承つておりますが此の度は全貌を窺ひ得て欣喜極く能わず一筆啓上致します。

温容慈父の如き針塚先生、井上先生の登山姿、阿形先生の特徴ある歩き振り、六ヶし顔をした大瀧先生、会津魂を説く和田剣道部長先生、テニス運動会に活躍される佐藤利博士、黙々として研究に余念なき佐藤春博士、朝早く千曲川に出かける古谷先生、學術會議員として活躍される蒲生博士、ニコニコ時々大きな笑いを発する林教授、テニスの倉沢教授、團場主任岩崎七段、修已寮の小林老書記東寮の老夫婦等々走馬燈の様に思い出される、何しろ十銭持つて要と共に馬場町の夜店に行

不ニシルク製糸K・K・勤務の栗原義藏氏の案内で老夫婦の寓居に厄介になる。地下水の豊富な事白桃の甘味い話を承つて、涎を垂らす程ケナル

「甲州路の一夜」——小淵沢に出て甲斐の國の風が肌に爽やかに當る、南に裏富士が高く聳えて目に入つたが矢つ張り富士は我々不二、田子の浦にうち出で見る富士が本物の富士(不戻)と柿木人磨が言つた通りだ。

甲府を過ぎて目下部駅(加納

ていたところ、来て下さったので私は大いに面目を施しました。是れも上田泰永のお蔭と感謝いたして居ります。私の村の唯一人、上田出身の前村長、野本治兵衛氏(養蚕科卒)は私が村長就任と同時に高血圧で倒れ九九年程寝ておりましたがついに昨年永眠されました。

懐しきの余り身辺の雑事と思ひ出すまゝを申し上げました、どうぞ私も千曲会の一員として御指導下さる様お願い致します。御上京の節はお立ち寄り下さい。

寄附各位の御健康を祈ります

東京都中野区官園通五の三三
中野区開田二警察大学
千代田区豊ヶ岡二の二
警務部 警本校助教授
(附記)金二〇〇円を頂きましてことを感謝致します。昭和二十九年年度に繰入れます。

(編集部)

舊友の諸君へ

クラス雑誌 ぼしんの復刊に当つて

山本友之丞

鈴木雄七君が職場で急逝したと聞いたとき一番先に浮んだ考へは遺族が幾人であつたかということであり又総領息子は何才になつてゐるかということだつた。それが子供さんは五人で、長男が高校生末つ子はまだ頭はない幼年者だと報され心痛む思いが深まつた。主人が丈夫で活躍してゐてさへも、子弟の養育には相当の覚悟が要するときに唯一の働手の主人を一瞬の中に奪われた貞子未亡人のご心中は察するに余りがある。第一、鈴木君も悠々これは大変だと自覚したときは全くやり切れない感情に包まれたであらうと同情の言葉もない。若しその瞬間偶然にも吾々級友の中の誰かがその場に行き合はせたとしたら、鈴木君は友情というものをどんなに有難いものであるかと感謝と期待を

れて一人の落伍者もなく幾星霜かを闊し得たものだ。これは当時世界の五大強國の一つとして極東に君臨した大日本帝國の國力が國民生活を支えていたという客觀的情勢は否定し得ないとしても、更に大きな原因は不世出の好漢、眞ちゃん小林眞一君がその身を血を啗まずに貴い努力を傾注して「ぼしん」を編集し會員の保育に任じたからに外ならなかつた。現に角その思はれた環境の下で朝鮮から台湾にまで散らばつていてもお互いの動静は明らかであつた。少くとも年一回の「ぼしん」をみれば二十九個の星々が氣をよよく遊んでいる様子が一目瞭然であつた。その「ぼしん」の十五會員達が會員の死を何年間も知らないでいたのだから事は重大だと考へたのである。樋口先生が昭和三年の春優進新卒業生に残されたお手紙の中に「知識は一晩で得られる、金は即刻手に入れたことが出来る、而して健康と友情は永久不斷の努力に依らざれば得ることはできぬ」と論されたお言葉がある(「ぼしん」創刊号)。これは悲しくも樋口先生から僕達への遺言となつてしまつたのだが、僕はこの三十三才で逝かれた樋口先生のお言葉を思い返して全く一言もないと思つた。俺達の感受性が全く枯渇し切らない今の裡に、何んとかしなれば遂にはお互い級友を失つてしまふことになるかも知れないぞ、と考へた。而君追悼のための「ぼしん」再刊提唱の意義は、若き日を懐しむ

ソチメンタルからのみでなく既に人生の斜陽の行程にあるお互いが、友情のきずなを確りと握り合い、お互い励まし合い乍ら陽の長い初夏の午後秋の終りを染みながら田植をする農家の如く、希望に充ちた生活を推進したいと思つたからに外ならなかつた。

「ぼしん」の原稿の集りは全「春日」の如く遅々とした感があり、発行は日々々々延びてしまつた。然し僕は素々遠慮氣兼ねの要らないのが友達付合の特長である。その裡には全員の揃うときがあろうとそれを待つことにした。この発行が遅れたことがよいことを拾つた結果にもなつた、それは当初鈴木君の急逝、山本誠君の物故等の衝激をうけて始めた今回の編集は兎角感傷的に偏する嫌はないでもなかつた。これが長い間にいつとはなしに反省されて、而君以外宮本、遠藤両君を含めた全物故級友の霊を慰め得られるものに改められて来たことである。但し途中から改変の加えられたものであるだけに宮本、遠藤の両君に対しては失礼の点が多々あると思う。この点は全く申訳ないがアノ通りのソツ者だつた僕の氣性が未だに改まらずにいるのだことが寛容下し置かれるに幸甚これに過ぎるはない。又小林眞一君については既に追悼録が出されてある。又中村岩人君の「ぼしん」第七号の小山君の記事にもある如く十四回に

「ぼしん」會員は中村君に先

追記 本文は「ぼしん」に編集後記として山本氏の執筆されたものである。千曲会の在り方が種々論議される折から、千曲会を構成する各クラスの旧友間の友情のつながりを客觀的になごめることに意義深いと思われる。そこで筆者山本氏の御了解を得て本紙に登載することにした。

(編集部)

お願ひ

会費納入

昭和二十九年度分会費未納の方は金二〇〇円を各支部会又は左記振替口座御利用の上至急納入して下さい。

振替口座 長野六二四三番
又は振替口座
東京四三三四一番

宛名
上田局区内信大織維学部
内社団法人 千曲会

(十頁最下段より続く)

が呆然としておられる。夕方……五時、全職員方に譲られて官舎に、そしてその後……六月十五日、お父様ゆかりの講堂に安置されたみ霊は「故鈴木雄七先生」の用旗や花輪に埋められ、全校の生徒、教職員及び父兄の方々の贈として声なき数千人の心に護られて告別の式が校葬に準じて執り行われました。祭壇の前に立つた私、身に余る盛儀に亡き夫の余栄を飾つて頂きましてたゞ、感激するのみ、この上はどうぞ安らかにご冥福を深く、御祈り申上げるとともに、どうぞお父様、この五人の子供の将来を御護り下さいと祈らずにはおられませんでした。ご遺骨を五十日間家に置き、七月三十七才の長男、寛の胸にしっかりと抱かれて、ご郷里愛知に向いました。どんなにかお懐しいことであらうご生家に声なき帰郷翌日学友、親戚の人々にお見送りを受け、思いがけない盛大な埋骨式をして頂きました。こうして夫、鈴木雄七は四十七才を一期として三河の國の山深き津具の里の金竜山中でお父様やお母様の側から永遠の眠りにつきました。

(写真、鈴木雄七氏、筆者は同末亡人)

千曲会と母校に望む

北條 舒正

千曲会報に初めてペンを取る機会を与えられたので目頭同志会や母校について感じていた事を申述べてその任を果したいと思ひます。これは化学を専攻している一卒業生としての私見であり種々異論もあると存じますので予め御了承願ひます。全国的に有名な千曲会も戦時中の連絡途絶後の混乱等により危機に立つていて、これを回復するには会の民主的運営同窓生在学生会への呼掛程度では到底期待出来ないのではないだろうか。旧制大学では特別な組織をもつた同窓会はなく必要の都度連絡するといふ程度が多い血が通つていて社会で活躍するためのバックボーンをなしている。これは母校が活動するための根拠地であり、これを有する事により大きい精神的な強味と誇りを持つため絶えず連絡をとらんとして積極的に努力している。翻つて吾校に於いては卒業以来十数年間も訪ねたこともない人も多く、その必要も感じないのではないかと、又卒業生である事を他の大学専門学校の人々に対して誇りに思つてゐる者が果して何人いるだろうか、今日大会社の幹部として活躍している古い卒業生も可成りいるが果してあとに続くべき後輩がどの位あるだろうか、又入学試験も年ごとに志願者数、

質は低下し、東京、京都に比べても格段の差が出来た事を認めざるを得ない。これらのよつて来る所を考へるに単に宣伝や表面的な改造では解決出来ない本質的な問題が横たわつてゐると思う。

私は冷静にその原因を検討しそれに対する方針をたて、思い切つた改革を敢行しなければ一地方大学として取残されるのみならず卒業生からも無視され存在価値すら危うくなる時代が来るのを恐れるものである、然らば如何にすべきか、これは簡単に決める事が出来ない問題であるが私見を述べさせて頂くと、

第一に学校の内容の全面的改善である。これは今迄に一度々云われて来た事であるが古い学校であるだけに非常に困難な問題である、現在の状況をみると大学に昇格して専門学校の時代のシステムがそのまま引継がれ、吾国の職能工業が大きく変動して来たのにその指導者を養成する機関が逆に時代に取残されてゐる感で、心ある卒業生は鋭い批判を行つてゐる。大学が時代に左右される必要はないが卒業生が社会に出て充分活躍出来る様に遠い将来を見通して教育すべきではなからうか。その点東京や京都の行方方も単に機軸のみでなく内容を考慮すべきである。又四科の三科迄が工学士を社会に送り

出しているのに組織学部が大学の農科系のグループに属しているのは不可解である。第二に卒業生の知識のバックボーンとして研究陣が充実している必要がある、即ち技術面その他で必要の際には母校に帰れば何とか解決出来るものと少くともその糸口を見出すことが出来るという感じを抱く程度になつておくべきである、地理的に不便でも恥をかかずに質問出来るので割に気軽に帰れるのではないかと論一定の人員で凡ゆる事を研究する事は不可能だが、各人が出来るだけ深く新しい知識を身につける様にしなければならぬ。この際必要な研究費の不足は何処の大学にも共通して居り少い費用を如何に有効に使用するか問題で要は人とその心掛けではないだろうか。今年の一月八日文獻調査で戦災をうけた或る大学を訪ねて図書館では超満員の研究員と学生で七時すぎ迄目的を達し得ず、実験をやつてゐる卒業生の激しい気魄と研究設備の立派さと教授達のボロ机と椅子のコントラストに感嘆して帰つて来た。

一ヶ月の冬休をのんびり楽しんでいて上田の学生を想ひ出すと四年間この様な環境で訓練された人々と社会で競うべき同窓生の将来に云い知れない焦慮を感じざるを得なかつた。他の大学や研究所を訪ねて帰る度に上田ももつと活気をたせねばと決心するがのんびりした夢閑氣に次第にゆるんでくるとを覚える。研究的な空気を作らんとして

始めた雑誌も五年になるが未だ二五回にすぎずやらせるのに一苦勞である。戦後始めた所から二〇〇回の記念雑誌の案内状を受取つた時には全く淋しい気がした。

新旧大学の区別が一応なくなつた今日旧制や都会の大学には函が立たぬとあきらめては永久に母校の榮ある見込めがな。上田専の全盛時代を担当して来た先生方は年老いられたが研究の第一線やその手足となつて活躍出来る方々も多くは卒業生である、老先生や千曲会員諸氏の暖かい援助と声援を期待すると共に研究費の不足や不平不満を耐えしのび同窓生諸氏が社会で大手を振って活躍出来る様を充實した誇らしき母校を建設すべく全力を尽くすではありませんか(本学助教教授 化)

チエインリアクション

清水邦達

最近、特に私たちに目につくのは色とり／＼のポリ塩化ビニル製のレインコート、ナイロン靴下、サランの婦人用バッグ或は旅行用ボストン等合成高分子物より出来た生活品の著しい普及です。この様な高分子物、ポリマーが出来る過程は委しく究明されてゐますし、そしてこの生成反応は二種に大別され、その一に連鎖重合反応 Chain Reaction Polymerization があることは、もう良く知られてゐます。

所でこの連鎖反応という言

葉について、どの分野で初めて使われたか私には判るよしもありませんが、新聞等にはよく見受られます。例えばデフレ現象の深刻化を金融引締めの影響は先ず間接的或いは小範囲に現われ消費財生産部門に不況をまきおこし、中小企業は相繼いで整理に入り之は連鎖反動的に生産財生産部門の大企業に波及していき云々、という様に記してゐます。

高分子重合についての連鎖反応は極めて複雑多岐な意味をもつやうですが、之の言葉の持つ単純な語感には色々な方面の現象をのべるに使われ興味があります。

マスコミユニケーションが縦横に発達している現在の社会では連鎖反応はますます威力を発揮しそうです。伝達機構の多岐な程、いわば反応促進剤、触媒濃度が密な程人々の衣食住精神活動に至る迄連鎖反動的現象が支配的になります。オールドリー型、ヅカ型、鶴賞読書傾向の類まで、戦後昨年度、卒業に際して、でました「常陸」に次の様な意味が記されてあつたことを記憶します。「学業の終りに臨み、初めて学問の始めを知り、之は恐らく卒業生の誰もがその胸中にいだいた感慨でありましようし、私も記された言葉をかみしめた一人でありました。

学生時代は、私たち個々について云えば連鎖重合反応における活性期、反応開始期とも言えるのではないでしようか。

専攻科に入学した私達には活性化の状態を一段と高エネルギー状態にもち来すもろもろの条件が与えられてゐます。更に私達が一人一人充分の意欲に燃えていれば、言わば二重結合をもつたモノマー(単量体)でありうる時は更に連鎖反応によつて成長しポリマーになりうることも可能な状態におかれてゐます。現在の生活は、自画像に充分な肉づけと美しい色彩を与える鋭いナイフとカラーペイントが豊富に用意されたアトリエでの生活にたとえられるかも知れません。而し自画像が作品となりうるには、筆をとする自身の才能と努力如何によることと明かです。

社会に直接出て独立した多くの友にも、これは共通した事柄であるにしても、与えられた条件は、極めて良好であることとす。この様な反応開始期から成長期をへて如何なるポリマーが出来るか之は興味ある問題でもありましよう。戦後に敗れ九年にならんとしている日本の姿は、未だ成長期を迎えたと思われません。新しく綜合大学として発足した私達の母校も之を反映してゐます。信州大学の現在迄の状況は言わば重合の反応開始期と見てよいではないでしようか。

漸く活性期を経て、今後如何にして連鎖反応を進展させるべきか。各学部は云わばモノマーであり而もその種類は同一ではなさそうです。各学部の融合と統一は共重合反応

(Copolymerization)の観
行してあります。活性から連鎖
反応への高エネルギーが必要
でしよう。促進剤。触媒。も
時には大きい役割を果します
不断の努力を充分高重合度
のポリマーを創ることに拮わね
ばならぬことが痛感されるで
はありませんか。ひるがえつ
て、私達の学部は、どうして
ようか。大きい足跡を残し、
大学として発展すべく歩み出
した時は恰も高分子科学の目
ざましい進出の時であつたわ
けです。このことは、やはり
学部について言いますと、現
在漸く成長期に入つたと申さ
ねばなりません。然し心強い

追悼

畏友早川直瀨君の面影

佐藤 利一

畏友北海道学芸大学教授農
学博士早川直瀨君は肝臓癌の
ため可憐な石効無く本年五月
九日遂に長逝された。享年教
え年で七十才即ち古稀の齡に
達して居るから年齢の上では
余り不足は云えぬが疾病直前
迄別に宿痼はなく極めて健康
で今後更に十年も十五年も社
会的に充分働ける氣力と体
力の持主であつたから其の
死は甚だ惜まれ真に月に露雲
花に風の感が深い。
早川君は群馬県立前橋中学
校を出て暫く小学校の代用教
員の職を勤めたこともあるが
眞に青雲の志を抱き憧れの学
風を慕い遠く彼を負うて札幌

同君の本校退職は前橋市の
一大製糸会社の群馬社の社長
に就任するためであつて其の
後は製糸業界で大に雄飛活躍し
たのである。然し社長在職は
僅に数年に過ぎず再び新しい
希望を抱いて上京し時勢を遠
くして空地利用会社の設立を
企て同君の非凡の努力によつ
て会社の新設に成功した然る
に同君はこれにも余りこだわ
らず三度転身して海軍省の委
嘱の下に毛皮用動物マートリ
ヤの増産に尽力し是亦相当の
成果を挙げることが出来たの
であるが今次の大戦の終結と
共に此の仕事は自然に消滅し
て了つた。飽迄活動性の旺盛
な同君としては此の鬱鬱閑と
して徒食する筈はなく今度は
農業関係図書文庫の出版を志
し自らも執筆して活動中、偶
々米進駐軍の招聘にに応じ農
政策関係の顧問に就任し得意
の英語の力を利用して克く其
の重責を全うし得たのである
一昨年の我國の独立に伴い進
駐軍の顧問も自ら解消するに
到つたがそれと殆ど同時に札
幌に在る北海道学芸大学の教
授に任用されて再び教壇に返
映し毎年五月から十月迄の半
年は札幌で教壇に立ち十一月
から翌年三月迄の半年は東京
で暮すことになり之を昨々と
今年と二年繰返したわけであ
つた。以上の如く早川君の一生を
顧みれば実に千変万化とも云
うべく多種多様の生活を繰り
広げたものであるが何時も止
むことなく活動を続け人一倍
の努力を傾注しているの往

く所可ならざるはなき成果を
収めている。頭腦明敏で其の
理解力と判断力とは正に抜群
で其の裁決は何事にても迅速
で正確であつた。日常人と対
話する際には話の筋道を半
分位聴くか聴かぬ中に其話の
結論を讀んで了う程度のもの
であつた。而も先見の明があ
つたために事を処するに果敢
であり英断的であり独断的で
あり尚批判的であつたために
往々人の誤解を招くことも等
あつて折角同君の敏腕によつ
てなされた仕事が必ずしも其
のすべてが世の好評を博する
とは限らない場面もあつた。
同君は非常な人格者で常に
正論を口にし開通つた事は断
じてしなかつた。人に極め
て親切で人情味がたつぷりで
就職の斡旋や結婚の仲介等に
は到底人の及ばぬ心遣と巧妙
さがあつた。
同君の最後の二年間の單身
赴任の教壇生活には或は無理
はなかつたが、発病は昨
二十八年八月頃で最初は単
なる黄疸の形でやつて来た当初
医師はウイルス性の悪質な
黄疸と診断し本人も素より之
を信じたのであるが別に苦痛
もなかつたので毎日教壇を採
つて居つたばかりでなく或時
は道内視察の旅に出掛けた
り又劇務的に大量の学生の卒
業論文を校正したりして居つ
たが身体は漸次衰弱の度を増
し遂に汽車旅行にも堪えかね
る状態に陥進し十一月急遽飛
行機で帰京したのである。次
いで十二月初に慶応大学の附
属の大学病院に入院し同二十
三日に手術すべく局所を切開
して始めて肝臓癌であること
が確認され手術せずに傷口を
縫合したのである。其の後の
数日は経過が最も不良で命旦
夕に迫る重態に陥つた。僕
は同三十日に同君を病床に昇
つたが意識は明瞭でも身体
の衰弱が甚だしく毎日輸血し
て漸く余命をつないでいる有様
であつた。生別死別を兼ねる
のかと悲しく別れたが其の後
不思議にも絶望だと云う医師
の予言は見事に覆えり漸次快
方へ向い奇蹟的にも本年二月
二十日に退院し得る迄回復し
た。歩行も可能となり回復の
一途を辿つて体力も増進を続
けたかに見えたのは矢張り一
時的の小康状態で結局は死病
に終つたのは残念である。斯
く一時的にもせよ或程度迄回
復したのは治療法の万全にも
よるが病人の精神力による
方が大であつたかも知れぬ。
肝臓癌であることは最後迄本
人に秘し且つ本人も氣附かな
かつたため必ず再起し得るも
のと信じて居つたらしい。入
院中かなり重態であつた時で
も学生の卒業論文を校正した
り読書したりして居つた。同
君の責任感と氣力とは只々
敬服の外はない。其の死は全
く殉職に値するものと確信す
る。
同君は信仰方面でも一度転
向して居る。学生時代から中
年期迄は熱心なクリスチャン
であつたが中途仏教へ転向
依し葬儀も勿論仏式で営まれ
遺骨は前橋市神明町源英寺の
瀧酒な墓地に葬られてゐる。
御影石の墓石には同君の戒名
全提院殿城南直心春道上座と

昭和十四年亡くなられた梅子
夫人の戒名、全香院殿能仁春
莊妙諦尼上座がならべて刻ま
れて在る。亡き梅子夫人は稀
に見る賢夫人で早川君が全
く後顧の憂なく思ふ存分活動し
得たのは夫人の内助の功が大
きい、琴瑟相和し家庭円満で
一男二女を養はれたが今は
皆立派に成人して幸福な家庭
生活を営んでいる。早川君の
趣味は謡曲書画焼物等である
が何れも丁度程よい加減の趣
向で趣味に溺れる様なことは
全くなかつた。又愛酒家であ
つたがこれも酒に呑まれる様
なことは全然なかつた。
上述の如く同君は最も多彩
な生涯を送つただけに其の追
話は頗る多いが紙面の都合も
あるのでこれで割愛するが同
君は非凡な努力家であり活動
家であつたが夫に生存中に人
の二倍三倍否夫以上の仕事を
なし遂げた事は事実である。
要するに其の足跡は極めて偉
大なもので或は専門の学問の
上に、又教育界のために又実
業界のために多大の業績と指
針を残し其の功績は偉大な
ものがあると思う。
最後に謹んで我友の冥福を
祈り併せて御遺族の繁栄を祈
つて筆を擱く。(本学部教授)

日本製糸学会中部講演集Ⅶ
蚕の化性決定機構：福田宗一
硬化病はなぜ跡を絶たないか
自動繰糸について：林 貞三
定価一三〇円(送料共)三六頁
希望者は上田市信大日蚕糸
中部支部宛お申込み下さい

田口	小山	石川	今井	土屋	西村	田中
亮平	長雄	博	甲子男	幾雄	善次	茂光